

九州北部豪雨災害における文化と復興：「災害流木再生プロジェクト」を中心に

知足, 美加子
九州大学芸術工学研究院

<https://hdl.handle.net/2324/7403527>

出版情報：Western Japan NDIC news. 58, pp.32-37, 2018-03. 九州大学西部地区自然災害資料センター
バージョン：
権利関係：



九州北部豪雨災害における文化と復興 ―「災害流木再生プロジェクト」を中心に―

九州大学 芸術工学研究院
知足(ともたり) 美加子

はじめに

自然災害からの復旧・復興にあたって、地域に根付く文化風習をないがしろにすることはできない。なぜなら、地域文化を理解することは、被災者の「感情の連続性」を守ることに繋がるからである。自然災害のカタストロフは、人間のあたりまえの日常を寸断してしまう。被災者は、ある日突如として「昨日と繋がらない今日」を生きることを強いられる。

2017年7月5日、九州北部豪雨災害が起こり、約21万トンの流木が被害を拡大するという事態となった(図-1)。被災地(福岡県朝倉市、東峰村、添田町、大分県日田市)では、特に木に対して、恐怖や怒りといった感情が向けられがちだった。

九州大学では、災害直後より異分野の研究者が結束し「九州北部豪雨災害調査・復旧復興支援団」として被害の調査や復旧に取り組んだ。芸術工学研究院では、建築やデザイン、アートを中心に「災害流木再生プロジェクト」を行うこととなった。木に対する負の感情を少しでも軽減し、復興につなげようとする取り組みである。

被災地は森林や河川に近接した地域である。森林およびその恵みである水に対する被災者の不信感が、離村を加速する可能性もある。復興は環境や生活の復旧だけでなく、地域への愛情を基盤にした「心の復興感(前を向く力)」が必要である。被災地は、英彦山(ひこさん)修験道文化圏にあり、古来より木と水を文化的、精神的な支柱としてきた地域である。

本稿は、主に木に対するイメージに働きかけ、地域をエンパワーメントする創造的実践について述べるものである。



図-1「流木集積所(旧朝倉農業高校)」2017年

1. 心の復興感

意識という目に見えないものが、現実を復興へと動かす力となる。中越地震(2004年)における復興検証報告書では、復興における地域の「気持ち」の重要性が述べられている。

「自然災害を目の当たりにした時、大災害に対する無力感や喪失感から、どうしても気持ちが立ち止まり、なかなか前に進む元気を持つことが難しくなっています。(中略) 建物が100%再建されたというような数値によるものではなく、市民の感覚的な復興感が大切であり、人が前に進むとするその気持ちが『復興』を前進させ、現実のものとしていくのだと考えます」¹⁾

中越地震(2004年)で被災した山古志村は、河道封鎖によって土砂災害に見舞われ離村を余儀なくされた。しかし、震災の翌年に行われた伝統行事「角突き(牛同士の闘牛)」が人々を励ました。祭りという伝統文化が地域の結束力を高め、復興に寄与することが再認識されている。帰村に向けての意識作りに尽力したため、2015年の帰村率は約5割²⁾となっている。当時の山古志村長・長島忠美が「2年で帰村しよう」と目途を示したことも功を奏した³⁾。住民と行政が議論を重ね、復興への意識作りを行った。

今回の九州北部豪雨災害は、大規模な山林崩壊と河川氾濫をともしうものだった。大量の流木が発生し、その殆どはバイ

オマス化されることとなった。流木や土砂が損壊を拡大したことは、森林や河川、特に「木」に対する人々の恐れを生み出した。地域の自然環境への不信感が、帰村を阻みかねない事態となっている。一方、林業関係者は自らの森林被害だけでなく、流木に対する人々の負の感情に深い心痛を負った。

このような状況をふまえて、芸術工学研究院では以下の4つの観点から、木を中心とした地域感情や意識にアプローチすることとなった。

1. 地域文化の再評価：矜持の創造→住みたくなるまちづくり
2. 地域外からの関心を集める：アテンション→観光、仕事創生
3. 不安や緊張の緩和：レジリエンス→心の回復、前を向く力
4. 忘却への抵抗：意識継続

次章より、1については英彦山修験道文化との関連から、2～4については災害流木再生プロジェクトの実践から報告する。

2. 英彦山修験道における木の文化

九州北部豪雨災害による文化財被害は26件あった(表-1)。福岡県の文化財被害は11件、そのうち4件が天然記念物の樹木であった。福岡県添田町の町指定天然記念物「吉木の山桜」(図-2)も豪雨で倒壊している。添田町ではクラウドファンディングを利用して、この山桜の彫刻を作り、添田駅に設置しようとしている。日田彦山線(添田駅～夜明駅)は未だ災害通行止めが続いており、鉄道開通への願いを込めて彫刻設置をしたいという。その彫刻と返礼品制作を筆者が請け負うこととなった。この事例のように、樹齢を重ねた木のいのちが不本意に途切れたとき、それを活かしたという心情が働くのはなぜだろうか。

復旧・復興にあたって、地域の文化を理解することは、場に根付く感情の連続性を守る上で重要である。九州北部豪雨被災地は、英彦山修験道文化圏との関わりが深い。修験道は、古来より自然そのものを神仏と考え自然を護持した。

表-1「九州北部豪雨災害による文化財被害状況」2017年(筆者作成)

九州北部豪雨災害による文化財被害状況		
	福岡県	大分県
1	普門院本堂 (国指定重要文化財)	草野家住宅 (国指定重要文化財)
2	杷木神籠石 (国指定史跡)	長福寺本堂 (国指定重要文化財)
3	堀川用水及び朝倉揚水車 (国指定史跡)	行徳家住宅 (国指定重要文化財)
4	久喜宮のキンメイチク (国指定天然記念物)	旧矢羽田家住宅 (国指定重要文化財)
5	朝倉市秋月伝統的建造物群保存地区 (国選定重要伝統的建造物群保存地区)	廣瀬淡窓旧宅及び墓 (国指定史跡)
6	秋月城跡 (県指定史跡)	ガランドヤ古墳 (国指定史跡)
7	古塔塚のナンジャモンジャ (県指定天然記念物)	石坂石畳道 (県指定史跡)
8	シュロ蓑製作 (県選定保存技術)	日田市豆田町伝統的建造物群保存地区 (国選定重要伝統的建造物群保存地区)
9	久保島の石造桁橋 (朝倉市指定有形文化財)	豆田まちづくり歴史交流館、旧古賀医院・旧船津歯科 (国選定重要伝統的建造物群保存地区)
10	塔ノ瀬観音の森 (東峰村指定天然記念物)	岩尾家住宅 (旧日本丸製薬所) (国登録有形文化財)
11	吉木の山桜 (添田町指定天然記念物)	山田家住宅 (国登録有形文化財)
12		井上家住宅 (国登録有形文化財)
13		井上酒造 (国登録有形文化財)
14		小鹿田焼の里 (国指定重要文化的景観)
15		小野川埋没林 (国指定天然記念物)
(2017年9月時点) 福岡県教育庁、日田市教育庁調査		



図-2「吉木の山桜倒壊状況」2017年(添田町役場提供画像)



図-3「鬼杉」樹齢1200年

英彦山は水分神（みくまりのかみ）とよばれ、水資源と、水を担保する木を大切にしてきたところである（筆者は英彦山山伏・知足院の末裔）。多くの場合、神棚のお札の中には木が入っている。また日本には海外より圧倒的に木彫仏が多い。私たち日本人は古くから木に対して祈ってきたのである。

被災地の東峰村(英彦山の麓)には「行者杉」という樹齢200年から600年、約4.68haにわたる375本の杉の巨木群がある。英彦山山内には「千本杉」と呼ばれる杉林、樹齢約1200年の「鬼杉」(図-3)など、修験者が植樹したとされる杉が多数存在している。修験者の十界修行のひとつとして「出生勧請」がある。これは仮の死を経て、山から新しい命を授かる(擬死再生)儀式である。生まれ変わった修験者は、先祖を思いながら枝を投げた(植林した)という。

このような文化思想が、九州における挿し木技術の普及に影響を与えたと筆者は考えている(英彦山は明治以前、九州一円に42万戸の檀家をもち大きな影響力があった)。

英彦山の神領を七里四方とよび、鎌倉期以前は九州北部豪雨災害被災地を含め守護不入⁴⁾の領域であった。水資源への信仰が里民の寄進を促し、英彦山はどの藩にも属することなく独立を保った。

1333年、後伏見天皇第6皇子長助法親王(助有)が英彦山座主(ざす)となり、山内ではなく現在の朝倉市黒川で神領を治めた(1573年より座主は山内に移る)。よって被災地のひとつである黒川地区の英彦山信仰は特に厚かった。豪雨被災地に点在する高木神社(大行司)は、英彦山の神域を示している。

英彦山山伏の自然護持の姿勢は、「四土結界」という思想にも表れている。結界とは宗教的な忌避を伴うゾーニングのことである。

英彦山は標高1199mあり、これを一定の標高毎に4つに区分する(A常寂光土、B実報莊嚴土、C方便浄土、D凡聖同居土)(図-4)。これは修行による精神的な成長



図-4「英彦山四土結界」(添田町役場提供地図に筆者加筆)



図-5「採燈護摩」英彦山神宮 2016年

段階と対応しており、最上部の結界Aは峰入り(約40km間を歩く十界修行)を15回修めた山伏しか立ち入りを許されず、汗や涙など水を汚す行為を厳重に慎む必要があった。ブナの原生林を保護する。結界Bは人が住む家を建てることを禁じ、千本杉が植林されている。結界Cには山伏の住まい(坊)が約800戸あり、里の檀家の来訪を受け入れていた。結界Dは五穀栽培が禁じられていたが、山伏以外の人間も居住が許されていた。結界思想は、神仏である自然を守ることに関与した。山内の木は、山外からの持ち出しを禁じられていた。

山伏の修法のひとつに「護摩焚き」があ

る(図-5)。これは柴を焚き、自然界にある木火土金水の要素(五行)を一体とするものである。概ね、木に関する山の仕事を集約したものと考えられる。

修験道は、神仏習合(しゅうごう)を旨とし、神道や仏教を組み合わせ多元的な価値観を共存させた。これも自然が信仰対象であったことから成立した概念であろう。

例えば木彫仏は、「仏という対象」を「神の依り代としての木」を用いて彫っており、仏と神を同時に拝むことは矛盾しないのである。また山中他界観では、亡くなった魂は山を登って土や木や水に還り、神仏(自然)と一体化するという。自然を思考の中心におけば、先祖崇拝や神仏への信仰は、違和感なく共存できるのである。先祖信仰とは特別な宗教ではなく、木と水の恵みを理解し、感謝できる人々の自然な感情だといえる。木や水の恵みは一朝一夕で生まれるものではなく、先祖の尽力があってこそ享受できるからである。

このように木や水に対する物語を再評価することが地域資源(観光資源)となり、住民の矜持を高め、前を向く力に繋がると筆者は考えている。

3. 災害流木再生プロジェクト

九州北部豪雨災害の前年に熊本震災が起こっていた。熊本震災では度重なる余震から車中泊する被災者が多く、健康問題が深刻化する傾向にあった。そのため芸術工学研究院では、被災者の自宅敷地内に板倉構法による避難小屋を建てる提案する取り組み「板倉の家ちいさいおうちプロジェクト」を行った。また地域の木材資源を活用し、森と人の暮らしを繋げようとした。

森への意識を高めることが森林資源の活用を促し、防災に繋がる森づくりを可能にするとメンバーは考えていた。ところが翌年、九州北部豪雨災害が起こり、森林からの流木が被害を拡大する事態となった。熊本震災支援のメンバーである朝倉市の杉岡世邦(杉岡製材所)の森も被害

を被っている。杉岡は「木もまた被災している。いのちとしての木を活かす方法はないのか」と自問していた。このような状況をふまえ、芸術工学研究院では「災害流木再生プロジェクト」(建築、デザイン、アートの分野で流木を活かしたものづくり)を行うこととなった。

具体的には、田上健一による「公共施設等の看板制作」(図-6)、尾方義人による「家具作り、グライダーワークショップ」(図-7、8)、筆者による「彫刻、しおり作り、時計ワークショップ」(図9、10)である。

田上(建築)は熊本震災支援のメンバーの一人であり、建築の木質化を鑑み研究を行っている。杉の産地である福岡県那珂川町との自治体間交流を促し、公共施設の看板に災害流木を活かしている。また、鹿児島県霧島市の板倉構法による建築物の看板も制作している。

尾方(プロダクトデザイン)は、東日本大震災支援より避難所における環境整備や、廃材の再利用についての研究を行っている。研究室の学生とともに災害流木による家具や木製品制作等、地域の新しい産業づくりを提案する活動を行っている。また朝倉市立志波小学校において災害流木を使ったグライダーワークショップを行った。普段は仮設校舎に通う児童たちが、久しぶりに母校の体育館でグライダーを追いかけて走る姿は壮観であった。九州大学災害支援団は次世代への働きかけを重要視している。子供たちが地域を好きでいてくれれば、彼らが成人した際の帰村率に影響を与え、未来はあると考えている。

知足研究室では学生達がデザインした災害流木しおりを販売し義援金にあてる活動をしている。また、統廃合される朝倉市の松末(ますえ)小学校、久喜宮(くぐみや)小学校、志波(しわ)小学校の児童に、144年続いた校名と校章を刻んだ流木しおりをプレゼントしている。

また、筆者は、樹齢132年の樟の流木の彫刻(水の守り神としての龍)を、被災地の小学校に寄贈することとなった。

朝倉の松末地区は、最も被害が大きか



図-6 田上健一「災害流木による看板づくり」
2017 年



図-7、8 尾方義人「災害流木による家具作り」
「グライダーワークショップ」2017 年



図-9、10 知足美加子「彫刻下絵」「流
木しおり」2017 年



図-11「災害直後の松末小学校」2017 年



図-12「松末木と石の時計」2017 年

ったところのひとつである。松末小学校は避難所となり、児童だけでなく近隣住民の命を豪雨災害から守った(図-11)。

小学校近くには、上部からの流木を松末小学校側に流れないようにせき止めていた杉(杉岡所有の森林)があった。筆者はこの杉材と校庭の小石を使って「松末の木と石の時計作りワークショップ」を 2018 年 3 月に行う予定である(図-12)。子供達の手の中で、木が大切なもの、愛されるものとして生まれ変わってほしいと願っている。

この他、朝廣和夫は被災者の生活基盤である農地復旧に大きく貢献している。5 年前に同じく豪雨被害を受けた八女地区との連携もすすめている。城一裕によるデジタルファブリケーションを応用し

たデザイン提案、稲村徳州による自転車ツーリズムの提案などがある。以上の活動は、芸術工学研究院の工作工房と技官達の協力に支えられている。

おわりに

本稿では、九州北部豪雨災害に関して、「木」を中心とした文化的考察と創造的実践について述べた。九州北部豪雨災害では、大量の流木による土砂災害が人々の意識に与えている影響を鑑み、木への負の感情にアプローチする「災害流木再生プロジェクト」に取り組んだ。豪雨災害被災地が英彦山修験道文化圏であることから、木や水などの自然信仰に基づいた文化観について述べた。被災した自然環境を復旧し、倒れた木のいのちを何かに活かしたいという願う心は、英彦山に限らず、森林と共に暮らしてきた日本人には共有できるものであろう。これからも木を中心にみえないものへの想像力を養い、創造し、行動していきたい。それが、「昨日と繋がらない今日」を「あたりまえの今日」に変えていく小さな一歩になると考えている。

文末脚注

- 1) 「小千谷市復興計画長期検証(総括)」2016年p.21.
<http://www.city.ojiya.niigata.jp/uploaded/attachment/4128.pdf>(2017年12月6日確認).
- 2) 牧紀男「災害・復興の影響評価と事前復興の取り組み」2015年.
<http://www.boukakiki.or.jp/H27-4-2.pdf>(2017年12月6日確認)
- 3) 「新潟中越地震から3年2ヶ月で復興した旧山古志村」2012年.
<http://diamond.jp/articles/-/16499>(2017年12月6日確認). やまこし復興交流館「おらたる」(2014年～)は震災の記憶や地域の魅力を伝える場所であり、被災者がここから語り部として派遣される制度もある。
- 4) ある地域への守護の立ち入りを禁じること。荘園や寺社領に与えられた特権で、そこでは守護による租税の徴収や罪人の逮捕ができなかった。